

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：33707

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02255

研究課題名（和文）精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究

研究課題名（英文）A study to develop a user-involved evaluation system in facilities for the mental disabilities

研究代表者

加藤 大輔 (KATO, Daisuke)

中部学院大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：00647604

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：精神障害者施設の施設評価に関して当事者の参画状況を把握するために、地域活動支援センター職員や精神障害者施設の施設長へのアンケート調査、クラブハウスを利用する当事者へのフォーカスグループインタビューや国際認証に関与した当事者へのインタビューを実施した。その結果、当事者と施設評価を行うことで「新たな気づき」「支援の質の向上」「意見の尊重」「環境への影響」「職員の变化」につながり、施設にとってプラスの変化をもたらすと考えていることが分かった。一方、「当事者の本心が出づらい」「職員への攻撃」「個別対応の必要性」「状態・症状への影響」「当事者と施設との関係性の変化」を危惧していることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- ・意義は、当事者が参画する施設評価の意味や課題を当事者と職員から率直な意見を集約できたことである。
- ・精神障害者施設の施設長へのアンケート調査から、当事者と施設評価を行うことで「新たな気づき」「支援の質の向上」「職員の变化」につながり、職員や施設にプラスの変化をもたらすと考えていることが分かった。難しさは「当事者の本心が出づらい」「職員への攻撃」「個別対応の必要性」が明らかになったことである。
- ・クラブハウスを利用する当事者は「評価＝数値化」と捉えている側面もあり、評価そのものに抵抗感を抱いていることがフォーカスグループインタビューから浮き彫りになったことである。

研究成果の概要（英文）：In order to understand the level of user participation in the evaluation of facilities for the mentally disabled, we conducted a questionnaire survey for staff working in Community Activity Support Centers and directors of facilities for the mentally disabled, Focus Group Interviews with the Clubhouse user, and interviews with participants in the Clubhouse Accreditation. The results of the survey were as follows.

The user participation in the facility evaluation leads to "new insights," "enhanced quality of support," "respect for opinions," "impacts on the environment" and "changes in staff," resulting in positive changes for the staff and the facility. On the other hand, in conducting facility evaluations with users, some are afraid of "difficulty in expressing the true feelings of the users," "attacks on staff," "arising needs for individualized responses," "impacts on conditions and symptoms" and "changes in the relationship between users and the facility."

研究分野：精神保健福祉

キーワード：当事者参画 精神障害者施設 評価システム クラブハウスモデル 国際認証

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代から精神障害者のリハビリテーションや地域生活支援に関する取り組みが活発になり、1995年の「精神保健福祉法」成立によって、施策や制度の整備が加速した。精神障害は他障害と比べると福祉領域の対象になるのは遅れたが、「精神保健福祉法」以降、当事者である精神障害者の主体性が支援の中で大切にされ、施設運営においても自主性などが意識されていた。しかし、「障害者自立支援法」「障害者総合支援法」によって、三障害を一元化した政策へと転換され、施設で取り組む内容が“事業”という枠組みで示されるなど、当事者主体よりも施設主体へと変化した側面もある。また、障害福祉サービスを利用するには、サービス等利用計画の作成や定期的なモニタリングが義務化されるなど、精神障害者を含めたサービス利用者は、常に管理され、評価される立場になった。つまり、サービスが利用者の生活に属するのではなく、サービスが施設に属するようになってしまった。一方で、施設や事業所は客観的な視点からの“評価”が求められ、福祉サービス第三者評価事業の受審が推奨されつつある。“評価”というものは、外部からの第三者的な評価は重要であるが、施設や事業所を利用する当事者もプログラム内容の振り返りに参加し、施設全体の取り組みを評価するといった内部評価も必要である。しかし、現状では、当事者が加わった評価は実践の中で十分に行われているとはいえない。

近年、疾病や障害を有する人、つまり『当事者』の立場にある人たちの力を支援の中で活かしていこうとする動きが強まっている。当事者の可能性に着目するのであれば、表面的な参加だけでなく、当事者が所属している施設の評価にも積極的に参画していける仕組みづくりが必要となる。この当事者参画型の施設評価システムを導入しているのが、精神障害者リハビリテーションモデルの1つであるクラブハウスモデルが実施している「Clubhouse International Accreditation：以下、国際認証」である。この「国際認証」の取り組みが、今後のわが国の施設評価システムを発展させる際に重要な要素を含んでいると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、精神障害者リハビリテーションモデルの1つであるクラブハウスモデルが実施している当事者参画型の独自の評価システムである「国際認証」という取り組みに着目しながら、わが国の精神障害者施設の現状に応じた当事者参画型の評価システムのあり方を提示することである。そのために、以下の3つのことを軸に研究に取り組んだ。

- (1) 当事者参画型の評価システムを構築するためには、施設側はどのようなことを意識する必要がある、また、どのような参画方法を検討しなければならないのか。
- (2) 精神障害者施設の利用者である当事者は、利用している施設の運営をどのように捉え、活動の質をどのように認識し、評価しているのか。
- (3) クラブハウスモデルが実施している当事者参画型の独自の評価システムである「国際認証」という取り組みは、わが国のクラブハウスにおいても有効性を発揮するのか。

## 3. 研究の方法

- (1) 精神障害者施設が当事者参画型の評価についての認識や、共に評価を行うことについて抱いている不安等を明らかにするために、地域活動支援センターの職員および精神障害者施設の施設長（管理者含む）に対してアンケート調査を行った。
- (2) 精神障害者施設を利用する当事者が、施設評価に参画することに対する思い等を明らかにするために、フォーカスグループインタビュー調査を行った。
- (3) クラブハウスモデルが実施している「国際認証」の具体的な取り組み内容や雰囲気、それに携わる当事者や職員の様子を把握するために参与観察を行った。「国際認証」後に、それに関与した当事者にインタビュー調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 地域活動支援センター職員の施設評価に対する意識調査〔2020年2月～3月〕

精神障害者施設が当事者参画型の評価についての認識や、共に評価を行うことについて抱いている不安等を明らかにするために、A県内の地域活動支援センターのうち、主な支援対象を精神障害者としている11ヶ所の職員に対して意識調査を実施した。調査は無記名自記式のアンケート調査で、回答者数は61人であった（回収率は95.3%）。

調査の結果、「プログラム内容の定期的な話し合い」は利用者を交えて実施している意識は高かった。しかし、「プログラム内容の振り返り」「年間の事業計画を作成するための話し合い」「年度末に事業計画の実施状況の評価」「施設の運営状況を共有する機会」は利用者を交えて実施している意識は低かった（図1）。

A県内の地域活動支援センターでは、当事者と職員が能動的なかたちで活動や年間計画を振り返るといった当事者参画を意識した評価は行われていない状況が明らかになった。職員は当事者と日々の活動だけでなく、施設全体に関することを共に振り返り、評価する姿勢を意識することで、より当事者参画が進んでいくと考えられる<sup>(1)</sup>。

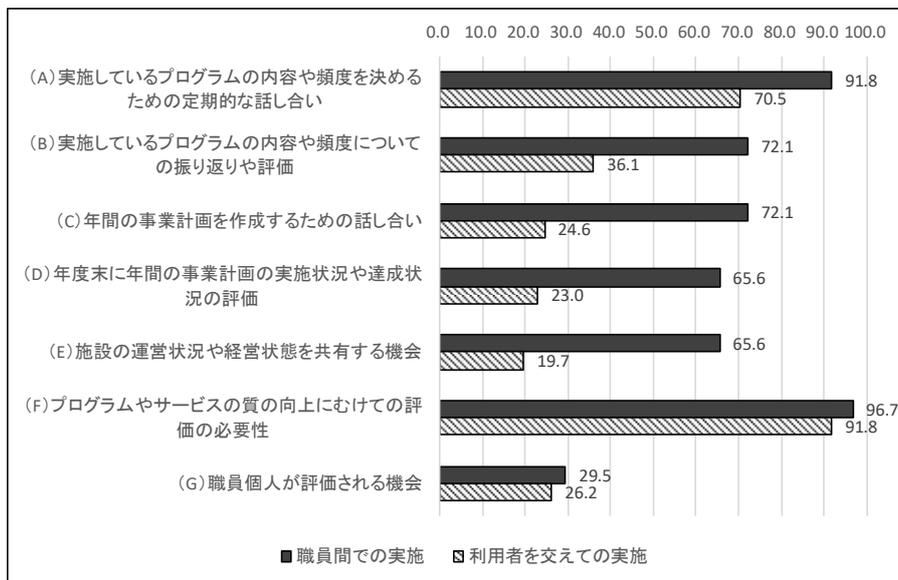


図1：施設で行われている評価の状況（「十分あてはまる」+「ある程度あてはまる」）

## (2) 精神障害者施設における施設評価等の実態に関する調査〔2021年1月～2月〕

精神障害者施設が当事者参画型の評価についての認識や、共に評価を行うことについて抱いている不安等を明らかにするために、A県内の精神障害者施設40ヶ所の施設長もしくは管理者を対象にアンケート調査を行い、35ヶ所から回答があった（回収率は87.5%）。

調査の結果、当事者の身近なものである日々のプログラムの立案や振り返りは当事者の声や意見が反映されており、当事者が参画していることがわかった。一方で、年間計画、中長期計画、施設運営に関する参画は少ない実態が明らかになった（図2）。

当事者と施設評価を実施する意向は、「したい」が11ヶ所、「したくない」が8ヶ所、「わからない」が14ヶ所、「無回答」が2ヶ所であった。「したくない」と「わからない」を合わせると約63%であり、当事者との施設評価の実施についてはやや消極的な姿勢であることがわかった。この背景には、職員が当事者と共に施設評価を行うことについての具体的なイメージができないだけでなく、当事者と共に施設評価を行った場合、施設や職員への批判、実現不可能な要望が出てくることへの戸惑い、それらに向き合うことの怖さや抵抗感もあると考えられる。また、当事者は施設評価といったものを経験したことがないため、実際に行った場合、精神的負担感の増大が病状悪化につながるのではないかと警戒感も職員は感じていると推察される（表1）。

当事者と共に施設評価を行うことに難しさを感じる一方で、実施した場合には施設にプラスの変化が生じるのではないかと期待感を抱いていることも明らかになった（表2）。安井は「職員の自らの気づきは、職員一人ひとりのサービス提供に対する意識変革をもたらす」と示唆しており、今回の調査で明らかになった『新たな気づき』と重なり合うといえる。当事者と向き合い、当事者の声に耳を傾けることで、「普段、聞き取れないニーズや困りごとが理解できる」「事業所の課題が見えてくる」「利用者目線の改善点が見つかる」ことにつながり、日頃は見逃している当事者の個性・特性・願いを再確認する機会となり、サービス提供に対する意識変革をもたらすと考えられる<sup>(3)</sup>。

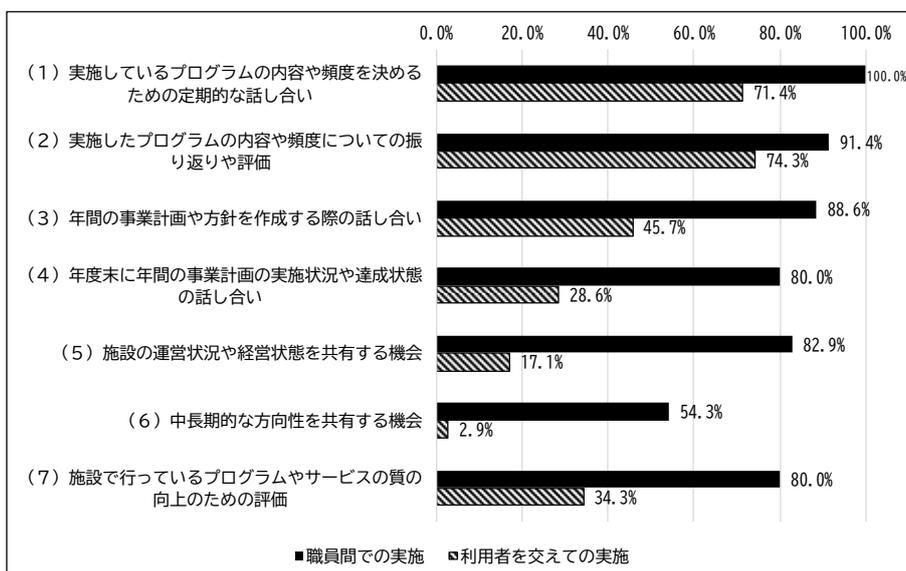


図2：施設で行われている評価の状況（「十分あてはまる」+「ある程度あてはまる」）

表1：利用者と共に施設評価を行うことの難しさ

カテゴリ	度数	利用者と共に施設評価を行うことの難しさ (抜粋)
利用者の本心が 出づらい	8	・職員相手では本音が出ない可能性。 ・思いを伝えることが苦手な方の意見を聞くことの難しさ。 ・利用者からの意見は、施設の評価というよりは、個人的な要望や不満に片寄ってしまうのではないかと。 ・特定の利用者個人の思いに偏りがあることも多い。 ・サービス内容の良否が顕著になり、利用者のニーズの抽出に工夫が必要かと思う。 ・正直な気持ちを表現してもらいにくく、日本人の特性としてオブラートに包んでしまいがち。
職員への攻撃	6	・職員へ過剰に批判的になる方もいるのではないかと。 ・職員の個性が指摘を受けやすい点。 ・職員への付帯で正直に評価していただけないのではないかと。 ・特定の支援員への悪口等 (悪評) によりやりづらさが出てこないか。 ・特に他者 (職員を含めて) への攻撃に転じた場合、対人トラブルに発展するのでは。
個別対応の必要性	6	・利用者は評価することに慣れていないため、趣旨を理解してもらうことに時間がかかると思う。 ・精神障害者の障害特性や状況により、個別対応が必要なものと区別が難しい部分があると思う。 ・評価が他の利用者にも通じる訳ではないと考えるため、もし利用者と共に行うなら個別で全員と行うことが必要だと感じる。 ・全員の要望をまとめて、実行することは困難。 ・利用者が評価した内容を全て改善することは難しく、その対応が難しいと感じる。 ・地域性などで難しい課題を指摘されること。
状態・症状への影響	5	・今まで施設評価についてあまり考えることが少なく、行うことで影響が気になる。 ・評価した場合、評価した際の精神的負担に配慮する必要がある。 ・症状の波に施設側が左右されることも多いと思われる。 ・伝えたいことがうまく伝わらない。
利用者との関係性の 変化	3	・利用者と一緒に評価を行うと、どこまで利用者へ施設の情報や意見を伝えるのか気になる。 ・施設の理念や意図と評価者 (特定の利用者) の判断の不一致。 ・施設の利用者の基本的な考え方や物事の捉え方を変えたいため、その人が嫌がることなどを積極的に言うようすすめ、促していく必要がある。こうした施設の利用者が良いものと評価することも考えにくい。
評価の方法	1	・評価の手法 (対面で行うのか、オンラインで行うのか)。

表2：利用者と共に施設評価を行った場合に得られる成果

カテゴリ	度数	利用者と共に施設評価を行った場合に得られる成果 (抜粋)
新たな気づき	9	・普段、聞き取れないニーズや困りごとが理解できる。 ・課題の明確化と具体的な改善点が明らかになる。 ・事業所の課題が見えてくる。 ・利用者目線の改善点が見つけられる。 ・利用者の「生の声」を聴くことでサービス向上のきっかけになり、改善すべき課題が明確になる。
支援の質の向上	6	・利用者のニーズに合ったより質の高いサービス提供につながる。 ・よりサービスの受け手のニーズに沿ったものになると思う。 ・一方で方向性のないサービスが実施できる。
意見の尊重	4	・建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 ・サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 ・利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 ・利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
環境への影響	3	・今よりも通いやすくなる施設になる。 ・能率の良い作業、職場の環境改善。 ・利用者の声を聞いての評価であるため、それが改善できれば利用者も過ごしやすくなると思う。
職員の変化	3	・職員にとっても意識の啓発に繋がると考える。 ・職員がサービスに対する意識が変化する。 ・職員間では指摘する点や難しい点や他事業所と比較して足りないところを明確にして問題点を気づかせてもらえる。 ・事業所の理念に合わない意見が多く出たり、事業所を批判する立場をとる方に対する対応が今の段階でよくわからない状況。 ・利用者から、今まで事業所に対して「こうして欲しい」「あんなことをして欲しい」と意見を伺ったことがあるが、どれも第三者にしてもらう事ばかりで、本人が取り組んでいくものではなかった。スタッフは、精神障害者を楽しませることが仕事だと取られたことがあった。利用者や支援者が目指す方向が同じであれば共に施設をより良いものにしていくため評価を行うことは意義があるものだと考えるが、望む成果は得られないと思う。
その他	3	・不明

(3) クラブハウスメンバーに対するフォーカスグループインタビュー調査 [2022年6月~9月]

日本クラブハウス連合に加盟している3ヶ所のクラブハウスを利用している当事者を対象に、クラブハウスごとでフォーカスグループインタビュー調査を行った (クラブハウスA:4名、クラブハウスB:4名、クラブハウスC:3名)。クラブハウスを対象にした理由は次の3つである。  
①国際基準を軸にしながら当事者と職員が協働しながら活動や運営を行っている。②「国際認証」という独自の評価システムを有しており、当事者と職員が協働しながら定期的に評価を行っている。③3ヶ所のクラブハウスは「国際認証」を2018年に初めて受審しており、当事者が参画する経験している。

施設評価に関するイメージは、「満足度」「サービスの質の向上」「外部評価」「客観性」「施設の可視化」「難しさ」などが挙げられ、対象がクラブハウスを利用する当事者ということもあり、「クラブハウスの理念」「メンバーとスタッフの相互の関係性」といったものも挙げられた。

施設評価することの難しさは、「数字に置き換えられない」「数字付けにあまり意味がない」「人間関係の部分にはブライレスな部分がある」など、数字 (数値) 化することへの戸惑いや抵抗感を有している意見が挙げられた。

意見を言いづらくさせている背景、意見を言えるようになるために必要なことは表3と表4の通りである。

調査から次のことが明らかになった。  
①施設評価からイメージされる内容は幅広く、「施設評価=〇〇」というものではなく、当事者にとって施設評価は身近なものではない。  
②当事者たちは「評価される」ことはあっても、「評価する」ことに慣れていないため、職員との関係性や活動内容等について数字 (数値) で評価することに抵抗感がある。  
③「当事者は施設を利用する立場」「職員は施設を管理する立場」というように、双方の立場や役割が明確な関係性の中では、当事者たちは本心や本音を表出することに躊躇いがある。  
④座談会や施設全体のことを検討するミーティング、定期面談、アンケートの実施など、当事者が自身の思いや意見を表出することができる機会を保障することが重要。

表3：意見を言いづらくさせている背景

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
スタッフの絶対性	上下関係	上下関係があると言いつらい 立場は絶対に職員が上
	同じ目標ではない	やっぱり上と下というふうに乗ってるところがある メンバーと同じ位置に来て同じ目標で見てほしい
	スタッフ主導の施設運営	話し合いをすっ飛ばして、どんどん決めてしまう くいくいっつやっていてもうまくいかない 勝手に決めてないでみんなちゃんと話し合いをしてほしい 決定権が施設の施設長だけになっている
	施設長の決定権	スタッフか絶対でありスタッフに反動的な意見は見られない
	反動的な意見を許さない	下手なことを言ったら入浴されるかもしれない感覚 恐怖感 管理された環境 横と縦の差が薄くて一体感よりも個々で管理されている
	スタッフへの配慮	スタッフのことを悪く言えない スタッフに面と向かって「こういうこと悪いですよ」と言えない スタッフにも気がつかない部分もあると思う 職員の色が気になる 作業で疲れている職員の色をうかがってしまう
スタッフへの諦め	スタッフの気分が落ちる	評価されたとしてもスタッフの対応は変わらない 評価をぶつけてもリアクションがない
	スタッフの反応が薄い	意見をぶつけてもリアクションがない 主体的や話し合いがもたずにならなくなる
スタッフの不誠実対応	スタッフのわかりやすい対応	強と弱があるというところまで聞かないから逆に悪くなってしまう
	スタッフの話しを聞かない	目には見えないため変わったかどうかの判断が難しい
客観的評価	変化の判断が難しい	スタッフにゆとりがなく人数を揃やした方がよい スタッフの忙しさをその人の人数の関係 スタッフの数が足りない スタッフの数が足りていない
	スタッフの人数が少ない	スタッフにゆとりがなくゆとりをもって仕事をしてもらいたい スタッフの忙しさをその人の人数の関係 スタッフの数が足りない スタッフの数が足りていない
スタッフ体制	スタッフのゆとりのなさ	スタッフにゆとりがなくゆとりをもって仕事をもらいたい 普段一生懸命に働いているのに「忙しいのに」と言えない 事務仕事が増えればよい
	スタッフの業務量	スタッフの業務量の多さ デスクワークが多くてメンバーとの交流ができていない
自己表現が不得手	人前で発言が苦手	個別の面談で話せることでもみんなの前では話せない
	言語化が苦手	言語化が苦手な人は多い 自分のことをうまく表現して作った自分ではないと言えない 本当のことは隠して作った自分ではないと言えない

表4：意見を言えるようになるために必要なこと

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
時間	施設での時間	新しい人はここに来るの遅く一杯一杯だから、利用が長い人のように意見を言うことができない スタッフなしでメンバー同士で気取らずに話したい 言えるようになるためにはメンバー同士の関係性やスタッフとの関係性
	メンバー・スタッフの関係性	リーダーが一人、その人の言うことと聞いて引く距離、一掃みんなで行って行く方がよい ミーティングが必要で、自分たちが意見を言えること 意見が言えなくても、その意見を否定しないという姿勢、やめたい意見を言う こちらの話を聞いてくれるため、他の話を聞かなくていい 建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
開かれたミーティング	定期的なミーティング	建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
	定期的なミーティング	建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
個別の意見の集約	定期的なミーティング	建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
	定期的なミーティング	建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
自己表現のサポート	定期的なミーティング	建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。
	定期的なミーティング	建設的な意見、利用者自らも参加して何かを良くしていくという意見。 サービスを受ける方からの率直な意見を聞くことができると思う。 利用者を実施することにより、利用者自身が施設あり方、活動について考えてくれるようになり、意見しやすくなる。 利用者一人ひとりにとっても施設に求める価値が違うため、共に行った利用者の個人のリアルな評価を知れることは意味がある。

#### (4) クラブハウス国際認証の参与観察【2023年2月～3月】

日本クラブハウス連合に加盟している3ヶ所のクラブハウスは、表5のように「国際認証」を受審した。各クラブハウスの「国際認証」の様子や雰囲気等を把握し、メンバーやスタッフがどのように「国際認証」と向き合っているのかを理解するために参与観察を行った。参与観察を通して気づいたことは以下のようなことである（抜粋）。

- ・積極的にファカルティに話しかけるメンバー、普段取りの活動に専念するメンバー、国際認証の取り組みから距離をとるメンバーがおり、メンバーはそれぞれのスタンスで国際認証に向き合っていた。
- ・ファカルティはメンバーに積極的に話しかけ、メンバーの生の声に耳を傾け、メンバーがクラブハウスをどのように捉えているのかを理解しようと心がけていた。
- ・クラブハウスの施設長や法人関係者を対象にしたミーティングの際も、メンバーの参加や出席を拒むことなく、開かれた雰囲気をファカルティは大事にしていた。
- ・ファカルティは「クラブハウスでいろいろな経験をしてきた私たちは、あなたのクラブハウスを良くするために何ができる?」という問いかけをしており、『評価者』ではなく『クラブハウスの仲間』というスタンスを意識していた。

表5：国際認証の日程と内容

	時期	ファカルティ (Clubhouse International 関係者)	内容
クラブハウス A	2023年2月15日～17日	メンバー：イスラエル在住 スタッフ：米国・ハワイ州在住	●ファカルティ2名（世界中の強力なクラブハウスに所属しているメンバー1名、スタッフ1名）が訪問する。
クラブハウス B	2023年2月20日～22日	メンバー：イスラエル在住 スタッフ：米国・ユタ州在住	●ファカルティはセルフスタディで提示された情報を確認し、クラブハウスのメンバー、スタッフ、理事およびその他の関係者と意見交換等を行う。 ●ファカルティはクラブハウスが国際基準をどの程度意識して活動しているかを評価する。
クラブハウス C	2023年3月13日～15日	メンバー：ノルウェー在住 スタッフ：オーストラリア在住	●訪問最終日、ファカルティはクラブハウス全体の強みを示し、改善のための推奨事項等をクラブハウスコミュニティに口頭で発表する。

#### (5) 国際認証に関与した当事者へのインタビュー調査【2023年2月～3月】

「国際認証」に関わったメンバーたちの思い等を明らかにするために、12名にインタビュー調査を行った（クラブハウスA：3名、クラブハウスB：3名、クラブハウスC：6名）。

2023年6月30日時点（本報告書の提出期限）で分析を終えていないため、ここではクラブハウスAの3名の発言のうち、「国際認証」に関わる中で感じたこと、考えたこと、気になったことに関する箇所を記しておく（抜粋）。

X氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分ができるとをやらばよいと思った。他の人が自分にできないことはカバーしてくれるはずだからと信じて。自分の力は本当に微量だと思っているし、微力だからこそ、他の人のカバーはいる。」</li> <li>・「一緒にやって、一緒にみんなで頑張ったという感じ。本当にみんな自分のできることをやって、パズルのピースを埋めるように補助しあって、一個の作品が出来上がったかなと思った。」</li> <li>・「ファカルティのメンバーとスタッフは違うクラブハウスから派遣されてくるが、意見がずれたりすることはないのかなと思った。」</li> </ul>
Y氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「これだけ大きなことをやり遂げたということは、私にとっては自信にはなりません。事前の準備を頑張ってやったということもあるが、3日間、体調管理して、一日も休まずに通所して、プログラムに参加できたことは、体調を崩しやすい自分にとっては、やっぱり自信になりました。」</li> <li>・「やっぱり責任という感覚を持てたのは大きかったと思います。責任感がなかったら、これはやれなかったというか、やらなかったと思います。」</li> <li>・「厳密にいうと、スタッフと一部のメンバーが協力してやっていたかなと思います。関心を持ってないメンバー、何をやっているかわからないメンバーもいました。今回の認証だけではないです。」</li> </ul>
Z氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「認証は、人間の関わりとか、そういうのがすごく混ざり合っていて、なんかすごい自分のためにもなったし、自分が一人じゃないと思った。」</li> <li>・「認証に対してみんなが必死になってやっているし、向こうの人（ファカルティ）もちゃんと理解してくれているから、いいなと思った。」</li> <li>・「認証は終わったわけじゃないよね。結果が出たわけではないから、それが怖い。どんな結果がくるか。」</li> </ul>

#### <引用文献>

- (1) 加藤大輔：精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究－A 県内の地域活動支援センター職員の施設評価に対する意識調査より－，人間福祉学会誌，20，87－94，2021
- (2) 安井秀作・平林由美：福祉サービス第三者評価事業の必要性和有効性を巡って－障害者施設の受審有無からの比較考察，関西福祉大学社会福祉学部研究紀要，17（1），71－81，2013
- (3) 加藤大輔：精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究－A 県内の精神障害者施設における施設評価等の実態に関する調査結果から－，人間福祉学会誌，22，71－78，2023

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加藤大輔	4. 巻 20
2. 論文標題 精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究 - A県内の地域活動支援センター職員の施設評価に対する意識調査より -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤 大輔	4. 巻 22
2. 論文標題 精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究 - A県内の精神障害者施設における施設評価等の実態に関する調査結果から -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人間福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤大輔、橋谷光喜
2. 発表標題 認証への挑戦
3. 学会等名 Clubhouse International World Seminar
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤大輔
2. 発表標題 精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究 - 岐阜県内の精神障害者施設における施設評価等の実態に関する調査結果から -
3. 学会等名 人間福祉学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤大輔
2. 発表標題 精神障害者施設における当事者参画型の評価システムの構築に関する研究 -クラブハウスのメンバーに対するフォーカスグループインタビュー調査から-
3. 学会等名 人間福祉学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関